



「広布に走れ」の成り立ち

「広布に走れ」は1978年（昭和53年）6月30日、結成21周年を記念した学生部幹部会の席上、新学生部歌として発表された。

この時、結成記念日を前に、新学生部歌を作ろうと有志が取り組んでいることを知った第三代会長池田大作先生が、「後継を託す諸君のために後世に残る学生部歌を作ってあげよう」と、自ら作詞・作曲を手がけ誕生したのが「広布に走れ」である。

何度も口ずさみ、推敲を重ねるなかで、池田先生は学生部の使命として3つの指針を示した。

「第一に、学生部は全員が人材である。第二に、学生部は全員が使命の学徒である。第三に学生部での活動は世紀の指導者に育つための修行である」こうした師弟の交流のなかで、「広布に走れ」は完成した。発表の場となった学生部幹部会は、若き魂が燃え上がる爆発的な会合となった。

「我と我が友よ 広布に走れ」

この鮮烈な呼びかけに、会場となった荒川文化会館は大きく揺れた。肩を組み、大合唱すること、じつに12回。歌にはじまり歌に終わった、決意の会合となった。池田先生は「信心という一点だけは絶対に退転してはならない」と訴えかけたうえで、英知の学生部によせる大きな期待を語った。「戸田先生は、つねづね『次の学会を頼む』と若い青年に期待された。私はその通りに歩んできたつもりである。と同じように、今度は、諸君の番である。21世紀を頼む——と繰り返し申し上げておきたい」

「広布に走れ」は、歌詞の二番の「学徒の誉れ」を「地涌の誉れ」と変え、発表当初から学生部のみならず学会全体で歌われてきた。

「歴史を創るは この船たしか」と励まし合いながら、創価の大船を世界の海原へ進めた。

学会歌の一曲一曲には、広宣流布の歴史が刻み込まれている。「広布に走れ」にも、激動の時代を戦い抜いた“世紀の勇者”たちの魂が流れている。

